

## 【図書紹介8】

金馬国晴, 安井一郎, 溝邊和成編『戦後初期コア・カリキュラム研究資料集』第1巻～第13巻, クロスカルチャー出版, 2018, 2109, 2020, 2021

最初に詳細な書誌情報を示しておく。金馬氏と安井氏が編者で2018年に第1期第1巻から第3巻の「東日本編」、2019年に第2期第4巻から第7巻の「西日本編」が発行。編者に溝邊氏を加え、2020年に第3期第7巻から第9巻の「附属学校編」、2021年に第4期第10巻「附属学校編補遺、境界編」と第11巻から第13巻「中学校編」が発行された。

各期の冒頭巻(第1, 4, 7, 10巻)には編者による「解題」が掲載されている。第1巻の解題は「戦後初期コア・カリキュラムの特徴と本資料集の意義」、第4巻は「戦後初期コア・カリキュラムの史資料と全国的・地域な動向・特徴」、第7巻は「附属校におけるコア・カリキュラムの構成—兵庫県師範学校・神戸大学の附属を中心に」、第10巻は「戦後初期コア・カリキュラムの中学校における展開と困難」となっている。「解題」は資料集を手にする読者にとってのガイド的役割にとどまらず、編者らによる長年にわたる水準の高いコア・カリキュラム研究の蓄積が披瀝されている。

さらに各期冒頭巻には「資料一覧」表が付けられており、その中には収集したものの資料集に採録されていない資料も含まれている。この「資料一覧」は編者らにより個々の資料の性格についてAからJの10種類の分類がなされており(「コアに関する一覧表」, 「とある週の時間割表」, 「子どもの作文, 学習記録」等), 膨大なコア・カリキュラムが掲載されている本資料集を手にして、読者が彷徨わず、自身の関心にもとづいて資料を分析作業をする上での大きな便宜となるだろう。

「解題」と「資料一覧」表を充実させたことの意味は、編者らがこの資料集をよい多くの研究者に活用してもらい、コア・カリキュラムの研究の発展を図りたいという願いと期待が込められていると理解している。

金馬氏が全国に散逸しているコア・カリキュラ

ムの資料収集を始めたのは2000年代初頭だった。自身の手元には「戦後初期カリキュラム史資料の提供依頼(案)」が残っている。現在は休眠状態(解散はしていないと認識している)の「梅根悟研究会」で金馬氏が配布したもので、依頼状を受け取った学校に訝しがられず、その本意が伝わるよう研究会に参加している学校現場の教師に意見を熱心に聞いていた。その姿から、氏の誠実さと並々ならぬ意気込みを感じたことを記憶している。

実際、資料集を手に取りれば、全国で金馬氏の依頼の趣旨に応じて集まった「千数百冊」のほんの一部とはいえ、掲載された資料の量に先ずは圧倒される。そして「解説」を読めば、膨大な資料の中から一部採択した資料の価値がよく分かる。

従来のコア・カリキュラムの評価は一部の学校とその資料をのみ足がかりに論じられ過ぎてきた。特にそれを痛感させられるのが第4期の編者らによる「境界編」とされた学校群と「中学校」の資料であった。編者らによれば、コア・カリキュラムとは「カリキュラムの総合度としては最高レベルに達している」もので、その「必須条件」とは「ありとあらゆる学びと暮らしを包括した総合性」にあるとし「各課程, 各教科, 各要素等に関わる様々な「境界」を内包」したものであるとする。この見解からすると、「理想としてのコア・カリキュラム」への「志向性」の弱さ、「躊躇」がみられる学校も新たに発見した資料群から見えてきたという(第10巻V頁)。こうした「境界例」とされる学校の存在から、逆に、従来見過ごされてきたコア・カリキュラムの特徴が浮かび上がる可能性がある。新資料から編者等による新たな探究の視点が今後も広がり続けることを期待している。

第10巻の「解題」(vii頁)によれば、資料の入手状況により第5期も発行する予定があるという。「冊子類の探索はまだ終われそうもない。ぜひ情報をお寄せいただきたい」とのことである。是非多くの読者が本資料集を手にして編者らの熱意に応じてほしいと願っている。

(富士原紀絵・お茶の水女子大学)